



# 母と壊れた機械



蜷川幸秀

その世界に貨幣は存在しなかった。

人々は思いのままに生き、そしてお互いにその生き方を尊重しあっていた。

光がやわらかく降り注ぎ、小鳥はさえずり、花や木々は光をたたえていた。

自分に出来ることは何でもします。皆が喜んで仕事を引き受けた。誰もが、皆の役に立つことを喜び、それを当然のこととして受け止めた。

花はいつでも咲き誇り、辺りには光がまばゆく、それでいてやさしく満ちあふれ、人々の喜びを祝福していた。

健二《けんじ》もまた、この世界の住人だった。

自らの仕事を見つけ、それを無償で引き受け、代わりに生活に必要なあらゆることを無償で手に入れ、皆とともに日々の生活を喜びあい、そして彼を取り囲むあらゆるものが慈愛に満ち溢れていた。

光が遠のき、健二は目を覚ました。そうだ、全ては夢だったのだ。「また、この夢かよ」健二は悔しそうにつぶやいた。

世界が理想で満ち溢れていれば、どんなに素晴らしいだろう。しかし健二が目を覚ました、六畳の薄暗い部屋はそんな理想とは程遠いように見えた。健二は布団にうずくまったまま、夢の中で見たその世界のこと、思いを馳せていた。部屋のカーテンは閉められ、床には脱ぎ捨てた下着やジュースの空き缶や読み捨てた雑誌などが無造作に散らばっている。

健二は思った、お互いがお互いを信じあえる社会だったらどんなに住み心地がいいだろう。ムラ社会ならではの息苦しさがあると人は言うだろうが、そこはまだ、建前と本音が存在する社会だ。僕が夢で見た社会は、お互いの心の内も手に取るように分かる、嘘をつくことが出来ない、嘘をつく必要のない人たちの社会だ。それに比べてこの社会はどうだろう。運転免許を持っていないと、車が無いと、遠くに行くことも出来ない。運転免許を取るのも、車を買うのも、お金がたくさんいる。僕にはどちらも無い。この社会ではお金を稼がないといけないことになっている。何か仕事をして、そしてお金を得て、そして自立し、家庭を持ち、妻子を養っていかなくちゃならないことになっている。でも、僕は働きたくない、今は大学生でモラトリアムってことになってるが、そんな僕にとって、いつも夢で見るあの世界が現実の世界だったら、と願わずにはいられない。

ひとしきり健二は考えをめぐらせた後、おもむろに布団から顔を出し部屋の中を軽く見回した。いつもと変わらない、見慣れた光景だ、健二は思った。残酷なほどかわりばえのしない日常。その部屋は傍目に見れば散らかり放題だが、存在する物すべてが健二なりの秩序をもって配置されていた。そして、何者をもその秩序を乱そうとしない、そのことが彼を不安にさせていた。

「何とかしなきゃいけない」健二は布団から頭だけを出したまま惰性でつぶやいた。そんなことは分かっている、どうすりゃいいか分からないから困っているんだ、と己の無意識の言葉に健二は反論した。

一九九六年、健二は大学1年生の初夏を部屋でひきこもりがちに過ごしていた。隣の部屋では彼の母が、何かにイライラしながら帳簿をつけていた。

生まれてから今に至るまで僕はずっと恥をかきっぱなしだった、布団の中で健二は思った。思い出した、小学校のころ、大勢の見ている中で僕を名指しして注意する人がいた。僕の母だ。授業参観のご父兄が並んで見ている中、僕を指差して「健二、もっとしっかりしなさい！先生の言うことを聞いてなかったの？」と叫んでいた。

健二の母は、健二に何か注意したいことがあれば、誰が見ていようと関係なく、思いつきざまに言った。友達が来ているときに、友達の目の前で「健二、足が匂うから洗ってきなさい」と言ったこともある。普通のご父兄は、子供に何か注意をするときはその子だけを部屋に呼び出して、他の人の前で恥をかかすことがないように配慮しているのを知ったのは、健二が大人になってからだ。

この影響で、健二は問題を起こすようになった。健二が何らかの理由で相手を注意する必要がある場合、その相手が周囲に恥をかかないように配慮することが出来なくなっていた。注意される側にまわる場合、周囲に恥をかくことは当然のことである、そう健二は考えていた、自分がそうであったように。このため、健二は大勢のまえで人を注意して逆に集中砲火を浴びることがあった。注意した相手は「そんなことをこんな大勢の前で言わなくてもいいじゃないか」と健二に言い、周囲もそれに同調した。健二は反論しなかったが、心の中では「大勢の前で言わないと注意する効果がないじゃないか。何を言っているんだ。間違っているのは皆の方だ」と思っていた。

また、健二は周囲の視線を必要以上に気にする性格だった。そしてその性格もまた母親譲りだった。母は、常に服装に気を遣った。外出するときはブランド物を身につけていないと心が休まらなかった。

健二の母は、健二のことを気にしていた。しかしそれは彼自身の悩みではなく隣近所への評判のことだった。健二は国立大学に現役で入った、そのブランドがあるから、母は安心していた。健二が何を考え、何に悩んでいるのか、そんなことは母にとってどうでもよかった。

「あんたが山に登って死んでも捜索隊は出さんからね、金がかかるから」

テレビで山で遭難したニュースが流れるたびに、母は健二にそう言っていた。これが登山をする子供を心配しての発言だとしたら、まだ理解できなくもない。しかし、健二は山には全く登らなかった。この親は、子供の命よりも自分の財産の方が大切だ、そう子供に向かって言っていることになる。いつものことなので、健二はそれを異常とは思っていなかった。他の家では異常なことが、この家ではまかり通っている。

健二の母、勝代《かつよ》は財産を手に入れてからおかしくなった。健二が中学生の時、勝代の父が亡くなり、その遺産の一部を勝代が引き継いだ。勝代が手に入れた遺産の多くは土地だったが、当時はバブルの真っ只中だったため時価総額は膨大なものになった。すぐに母はその土地を売りマンションを買い、家族3人引っ越した。残りの金額で別の土地を購入しアパートを経営することにした。

次に母は夫に言いがかりをつけて追い詰め、離婚届にサインをさせた。健二の親権は母が持つことになった。健二の父は、健二にとって数少ない味方の一人だったがそれを失う結果になった。健二は中学校で友達が少なかった。いじめや嫌がらせにあう事も少なくないが、学校で相談できる友達もおらず、一人で抱え込んでいた。そんな中で、数少ない相談相手が父親だった。勝代は、健二が父に会いに行かないように、父の所在を教えなかった。代わりに、父がいかにか悪者であったかを延々と説いた。健二は、違和感を持ちつつも、母の言うことを聞き入れざるを得なかった。

最大の相談相手を失い、健二の心は崩壊寸前だった。しかし、そんな健二に母はこう言った。

「いじめられた時こそ、勉強をしていい成績を取り、いじめた奴らを見返しなさい」

健二も、それに応じた。母のいうとおりにしていれば、皆にとって幸せな結末が訪れると信じていたからだ。そして健二と母の精神は、不安定ながらも、綱渡りの要領で安定を保っていたように見えた。

しかしその不安定な安定さえも、長続きしなかった。

母は、バブルがはじけ、土地の値段が下がり出したあたりから、徐々におかしくなり始めた。もともと不動産が得意な人ではなかったから自業自得だ。上がったものが下がっただけだ。勝代も、理屈では分かっていた、しかしどうしても納得できずにいた。このころから勝代は、何か思ったことを唯一の話し相手である息子に対してぶつけるようになった。何かあるとすぐに機嫌が悪くなり、どうでもいいことで注意したり、どうでもいい話をしたりした。

ある時は健二が受験勉強の合間に健二を呼んで突然「土地の権利書は土地そのものと一緒だから大事に保管しておかんといかんよ。あんたなんか騙されやすいんだからね」といった話を始めた。いうまでもなく健二は土地など持っていないし、まだ先の話だ。目の前の受験が先だ。

このように勝代はおかしくなっていたが、健二の受験を熱心に応援していたのも事実だった。このため、健二は、様々な感情を押し殺し、勉強に集中した結果、第一志望の大学に合格することができた。自宅に近い国立大学だった。息子を一人暮らしさせたり、私立大学に入れたりするとお金がかかるからだった。

健二が大学に合格しこれで一件落着、と思いきや、実態は逆だった。勝代は息子の受験という呪縛から逃れ、息子の全てを支配したいと思うようになっていった。

勝代は、健二が家にいる時は、受験時代と同様に勉強を強要した。勝代はよく健二にだらだらと話していた、勉強しないと、ろくな会社にいけないよ、え、なに、大学に入ってみんな遊んでいる？アルバイトしている？みんな遊んでるように見えて、人が見ていないところで勉強しているんだからね、え、みんな試験の時に尻に火がついたように焦ってる、って？あんた私に口答えするのか？許さないよ。

健二も健二で、勉強をやめられずにいた。受験時代の健二にとっては、勉強をすることが学校からも家

庭からも身を守る唯一の手段だったからそこで彼は勉強で身を守れると学んだ。しかし受験が終わっても、彼を取り巻く環境は良くなるどころかさらに悪くなった。だから彼はさらに勉強をすることで流れを変えられると信じたのだ。しかし、勉強をいくら続けても何も変わらない。健二は、そんな自分に疑問を感じつつもどうしていいか分からなかった。

こうして、健二は大学生になったが、友達も作れず、日々の講義を受けるだけのために大学に行き、それ以外は自分の部屋に閉じこもるようになった。部屋の中でも、大学の講義のテキストや板書を読んでは復習と予習を繰り返す日々だった。勝代はそのことを問題視していなかった。部屋にこもって勉強をしている健二を見て勝代はむしろ安心しているのであった。

健二は、周囲の友達を見て、自分も大学生らしい暮らしがしたいと思っていた。そこでアルバイトをしようとしたことがあった。勉強が出来る皆がしているように塾講師や家庭教師を申し込んでみた。しかしいずれも面接で落とされてしまった。暗すぎたり、しゃべり方や表情に問題があったのだろう。ほかの接客業は到底出来ないと思った。こうして健二はより深く、引きこもっていくことになった。そこで健二は、勝代にお願いをした。楽しいことがやりたいから、もっと小遣いを増やしてほしい、できれば一人暮らしをさせてほしい、と。僕は受験勉強を頑張ったんだ、現役で国立大学に入ったんだ、そのくらいのわがまは言う権利はある、そのお金で友達のように楽しみたい、と。しかし母はそれを聞いて烈火のごとく腹を立てて言った。

「うちにはお金がないんだからね！」

母の怒りは治まらず、嫌味をねちねちと聞かされた。土地の値段が下がって、どれだけ苦労しているのか、と。しかし勝代と健二の住んでいるマンションは都心の一等地に建っており地価が下がったとはいえなかなかの価値があったし、経営しているアパートの家賃は決して高額ではないが母子が二人で生活していく上では十分すぎるくらいだった。健二はそのことを知らなかったし、どうすれば調べられるのかも知らなかった。

健二が苦しみもがくの尻目に、勝代の態度はますます唯我独尊になっていった。外出時に身に着けるブランドはより高価なものになった。車を買換える際は、外国の新車にした。お金が無いお金が無いと言っているのに、自らの物を買う金には糸目はつけなかった。学校の教科書の知識しかない健二には、母の持つ服や車がどれだけの値打ちのあるものか分からなかった。

健二は大学に入学してから一貫して孤独を感じていた。大学のキャンパス内で楽しそうに話している友人を見たり、別の友達に誘われているところに遊びに行っているのを見ると、自分はどうしてこんなに虚しい生活を送っているんだろうと思った。あまりの寂しさに、しばしば部屋に閉じこもり、ひとり嗚咽にも似たうめき声をあげていた。そのたびに勝代は、ノックもせずに健二の部屋に怒鳴り込んできていた。

その日も、健二は布団の中で、嫌なことを思い出しぶつづつと独り言を言っていると、勝代が入ってきた。

勝代が人の部屋に入るときにノックをしないのは半ば習慣になっていた。職員室に入るときなど、部屋に入る前にノックをするのは社会では子供のころから当然のマナーである。しかしこのような家庭で育った健二は、ノックをするということを理解できず、なかなか身につけることができなかった。ノックの例に限らず、勝代は社会のルールを日常の生活で息子に教えようという意識がまるっきり欠如していた。そのような類のしつけは学校に丸投げし、テストの成績ばかりに目を光らせていた。

勝代は健二に文句を言った、うるさい、私は不動産のための大事な仕事をしているんだからね、と。そして自らの思いを布団の中の健二にぶちまけた。

「あんたは悩んでいるようだ、しかしあんたの悩みなんて、社会人のそれに比べればちっぽけなもんよ。それなのにあんたは、なさけない。あー、ばからしくて笑っちゃうわ。悩みなさい、そう、悩むだけ悩みなさい、ひやはは」

自分の言いたいことだけ言った後、健二が何か話し始めたにもかかわらず、勝代は黙って部屋を去ってしまった。

勝代は人の話を聞かない。自分の言いたいことを、相手の都合を考えずに自分の言いたいときにだけ話し、相手が話をしている途中でも、自分が飽きてしまえば席を立ってしまう。こんな調子だから、誰とも仲が悪く、友達もいなかった。親戚づきあいも最小限にとどめている。もっとも、健二の母方の親戚というのは誰も彼も勝代のような人ばかりなので、会いたがっていないのはお互いのようだ。しかし、今、健二が頼りに出来るのは母しかいなくなっていた。健二もまた、友達がいなかった。その理由のひとつに、うまく会話が出来ないことがあった。母の影響を受けて、相手の話をさえぎることが多く、相手を激怒させた。また、話を最後まで聞こうとしない母のもとで育ったため、早く話を言い切らないとお母さんが僕の話聞いてくれない、そう思うようになった結果、早口でどもりがちになった。このため、目に見えて相手がイライラしたり、不審そうな顔をしたりするようになったが、健二には理由が分からなかったし、どうしていいのかも分からなかった。

母が立ち去った部屋で一人、健二は布団をかぶって嗚咽した。健二の話を見かねずに立ち去った母の態度は、責められて然るべきものである。しかし、母と一緒に暮らしてきた時期が長い健二にとって、それが常識となっていて、健二は泣き寝入りするしかなかった。

健二にとって、勝代は言いたいことだけを言い、こちらの話を聞かない存在であり、自分はじっと耐えるしかないのだ、と諦めていた。しかしそれと同時に、自分の話を聞いてもらえないことに対する苛立ちは胸の奥底に溜め込まれたマグマとなり、噴火するのを今や遅しと待っていた。

勝代が実の子に対してこのような接し方をしているのは、本意ではない、少なくとも本人はそう思っている。勝代の理性は意図していないが、感情が先走り、理性はそれを止めることが出来ないでいるのだ。勝代はいい母でありたかったし、それを演じようと必死だった。しかしこみ上げてくる感情の津波に押し流されるがままになった結果、健二に心無い言葉を投げかけたり、話を聞かずに席を立ったりしているのだ。勝代にとってそれは本意ではなかったから、悪意もなかった。だから罪の意識もなかった。健二に対してだけではなく、これまで出会ってきた多くの人にも同じような態度で接してきた。このため、多くの人を悲しませ、憤慨させ、時には謝罪を求められた。しかし勝代は決して誰にも謝らなかった。

勝代は自分が悪いとは思えなかった。だから謝罪を求められる理由が分からなかった。彼女にとって、感情に押し流されるときは自分とは別人であり、自分が責任を負う範囲ではないと考えていた。事実勝代は、自分が感情に流されている間の言動を覚えていない。反省を拒否するために、自身に都合の悪いことを記憶から消しているのかもしれない。しかし勝代自身が忘れようとも、言われた相手は忘れることが出来ない。謝罪することも反省することも出来ない勝代にあきれ果て、皆彼女のもとを去っていった。

それでも勝代はいい人でいたいと思っていた。なぜ自分のもとに友達が出来ないのか理解できずにいた、いや、心の奥底では分かっている、それを認めたくないため、その思いを表層に上げないようにしていた。そして、悲劇のヒロインを演じていた。

健二が母の影響で対人面で問題を抱えるようになったのと同様、勝代が今の人格を持つに至ったのも、おそらく彼女の両親による長年の影響があった。

勝代の子供時代、父は銀行員で、家はお金持ちだった。母の幸恵《ゆきえ》は農村出身。二人はお見合い結婚。町で一番にテレビを買うなど、ご近所さんがうらやむお宅だった。

しかし母幸恵は、ぐうたら者で、何をするにつけても、要領がよくない。まず、家事をしない。晩御飯の洗っていない食器が朝になっても片付けられていないこともあった。家事を嫌っているのになかなか上達しない。このため、弁当作りも下手で、勝代はそのことをひどく苦しめていた。遠足の時は勝代はふたで隠しながら母の用意した弁当を食べていた。子供の世話に関してもひどく、特に、勉強の面倒を全く見なかった。勝代は幼稚園に行かせてもらえず小学校に上がるまで、文字も書けず、数字も知らなかった。このため、小学校に上がったとき、周囲の子供達が字を読み、計算が出来るのを見て、子供心に焦りと失望感を覚えた。

勝代は子供心に思っていた、こんなお母さんは嫌だ、自分が大人になったらいいお母さんになろう、と。料理もしっかり練習するし、家事もてきぱきやる、子供への教育もしっかりするぞ、と。

母もそうだが、父もひどかった。父は、夜な夜な酒を飲んで帰ってきた。そして何か母と言い合いをして、夫婦喧嘩が始まる。それが毎日のように続いた。怒号が飛び交い、お皿が飛び、そして床で砕け散る。その音は近所に響いていた。子供達は怖くて布団をかぶっていた。

勝代は家族旅行に行った記憶はない。代わりに、父は一人で海外旅行によく行っていた。つねに父が家庭の中心にあり、父の存在は、勝代達の恐怖の種であった。もし仮にここで母がしっかりと子供達を精神的に支えお互い助けあっていけば、問題なかったのかもしれない。だが、子供達にとって母幸恵さえも、恐怖の対象になりえた。

幸恵は社会のルール全般に疎く、自らのやり方で動く。自分が悪くても決して謝らず、むしろ相手を非難する。ある時、勝代が自分のお小遣いで買った香りのする玉をテーブルに置いていた時、幸恵はそれをお菓子だと思って断りもなしに口に入れた。そして勝代がそれは食べられないのだと説明すると、なぜそんな紛らわしいものをここに置いておくのか、と勝代を叱った。

また、若い頃貧乏だったため、幸恵は結婚してお金が入るようになっても相変わらずケチだった。町で一番にテレビを買っても、それを近所の人に見せるようなことは無かった。勝代はよく他所でテレビを買ったお宅にご近所さんが集まっている話を聞いたが、うちには誰も来ないのを寂しく思っていた。

さらには、社会のルールを守らないようなことを幸恵は自ら子供に指導していた。ある時勝代が腹を立てて机を叩いたことがあった。それを見た幸恵はこういった。

「やめなさい、家の中のものを壊すのは。壊すなら外に出て、公園とかのものを壊して来なさい」

このような母親だったが、勝代にとって自分が頼ることが出来る唯一の人間だったため、勝代は必死に幸恵にしがみついた。幸恵に好かれようと努力を続けてきた。

今では父は亡くなり、母とは別居し、適切な距離を置いている勝代だが、幸恵から受け継いできた人格は、払拭できないでいることを勝代は自覚できていなかった。



「勉強でもするか……」

健二はそうつぶやくとパジャマ姿のまま起き出し、机についた。卓上の蛍光灯が、カーテンで外の光を遮断された薄暗い部屋の中で、ひときわ明るく輝く。机の上には、大学の講義で使う数学のテキストが置かれていた。健二は黙々とテキストを読み始めた。イプシロンデルタ論法が何度読んでも分からない。梅雨の時期、部屋の中はじめじめしているが健二はクーラーをつけようとしなない。

健二が受験が終わってからも黙々と勉強を続けた理由は、母から身を守るためとは別に、もうひとつあった。勉強をまじめにすることで、自分の夢の世界の一員になれると信じていたからだ。

健二は、夜寝ている時、その世界のことをよく夢に見た。その世界では通貨は存在せず、人々はそれぞれ自主的に助け合い、必要なもの、必要なサービスを与え合っていた。皆、笑顔で、苛立ちや争い、悲しみはなく、常に明るい光が差していた。健二は、その世界のことを、アイデアの世界と呼んでいた。哲学者プラトンが言っていたアイデアが、その世界にはあった。その世界こそが、この社会の目指すべき所だと健二は信じていた。

健二は常々思っていた、まだ僕は実社会をよく知らないし、見た目の実社会はアイデアの世界とは全然違う、でも、実社会の大人たちの心の中では、きっと僕が夢で見たアイデアの世界を目指して、頑張っているに違いない。そして僕も立派な大人、つまりアイデアの世界を目指す大人になりたい。僕の身近な大人、学校の先生達はとても立派だ。どの先生も、僕のいうことを辛抱強く聞いてくれるし、悩み相談にも乗ってくれる。心がきれいだ。僕も先生のような大人になるんだ。そのためにも、先生が教えてくれたことを、しっかり学ばなくちゃ。そう、学校の勉強は、アイデアの、夢の世界を実現するために必要なものなんだ。大学受験では国語とか理科とか、心のきれいさには直接関係なさそうな科目ばかりだったけれど、これはいわば下積み。掛け算を学ぶためには先に足し算をマスターする必要があるのと同じで、本当に大切なことを学ぶには準備が必要なんだ。逆に、足し算を一度習った後忘れてしまうと、後で掛け算を学ぶとき困ることになる。だから、一度学んだことは、どんなことでもしっかり頭に入れておかななくちゃいけない。今僕は大学の講義で専門的なことをたくさん勉強してるけれど、まだまだアイデアの世界の実現に必要な講義はない。でも、きつともうすぐだ。それに、大学を卒業したら就職することになっている。社会で成功している大人たちは、きっと皆、心がきれいに違いない。だって、アイデアの世界を実現するために実社会が動いているのだから、そういう社会で成功する大人たちは、心がきれいでないといけないから。本屋でビジネス書というのを何冊か立ち読みしたことがあるけれど、みんないいことを書いている。きっと、心がきれいなんだ。だから僕も、ここまで勉強してきたんだ。大学でもしっかり学ばなくちゃ。そして心をきれいにして、立派な大人になって社会に出なくちゃ！

健二は自分の信念を疑わなかった。みんな自分のように、夢でアイデアの世界を見て、それを目指していると信じていたし、そんなことは空気がそこにあるのと同じくらい自明なことだから誰も話題に出さないのだと思っていた。中には勝代のように、アイデアの世界を目指しているようには見えない言動をする大人も健二の周りにいたが、彼らは生活が苦しいからそう言っているだけで、心の奥底では確固たるアイデアの世界のビジョンを持っているはずだという点に健二は疑いを持っていなかった。

そんな健二の信念は、ほどなくして崩れることになる。

やがて健二は数学の勉強が煮詰まると、あくびをして、パソコンの前に行った。パソコンとモデムの電源をつけ、パソコン通信のとあるネットにアクセスした。モデムのピーガガガという接続音が部屋に静かに響き、パソコンモニタの黒い画面に白い文字でネットの名前が表示された。

健二は大学入学を機に、母からパソコンを買ってもらった。健二にとってパソコンは初めてだったため、最初は文字の入力もおぼつかなかったが、部屋にこもることの多かった彼は多くの時間をパソコンの練習に割き、すぐに上達した。その後モデムを購入し、パソコン通信を始めた。

健二がアクセスしたのは、個人がホストを立ち上げている、いわゆる草の根ネットというタイプのネットだった。比較的近所さんが多く、健二の同級生もアクセスしていた。掲示板の書き込みにも活気があり、オフ会も頻繁に開かれていた。

健二は入会后、歓迎された。文字だけのコミュニケーションであり、彼の容姿や喋り方を見て敬遠する人もおらず、彼は幸せだった。健二は、フリーボードとよばれる掲示板に、日常の些細なことを書き込んだ。すると、見知らぬ人から、親切なレスがついた。日常生活で相手にされていない彼にとって、ネットは自分を受け入れてくれる場所となった。健二は徐々に、パソコン通信を心のよりどころにしていくことになった。

その日健二はネットのフリーボードで、先日彼が書いた、大学の近くで食べたおいしくて安い定食屋の話題に、ある人がその店のおすすめのメニューをレスしてくれたので、健二はそこにお礼のレスをつけた。

その他の書き込みを読んでいると、ネットの知り合い数人が『インターネット』なるものを始めたということで体験談を書いている。そういえば最近、インターネットを始める人が多いみたいだな、健二は思った。なんでも、インターネットは世界中のホストにつなげて様々なコンテンツが見られるという優れものらしいが、健二のパソコンのOSもモデムの性能も対応していないうえ、プロバイダと契約する必要があるが、接続料がかなりの金額になることもあり、健二は魅力を感じなかった。なにより健二は、草の根ネットのコミュニケーションで満足していた。

それから数日後、健二がアクセスを始めてから三ヶ月目のある日、彼はトラブルを起こしてしまった。

そのネット内で古参が集まっているSIG《シグ》に健二が横柄な書き込みをしたことが原因でSIGのメンバーから非難を受けることになった。SIGとは特定の興味をもつ人たちのコミュニティのことで、一見さんを歓迎するSIGもあれば、よそ者お断りのSIGもある。健二が問題を起こしたSIGは後者だった。通常、SIG内の書き込みをいくつか見ていけば、そのSIGの雰囲気を感じることが出来るはずだった。しかし、健二はそれをせずに書き込んでしまったのだ。

もし健二が、すぐに自分の非を認め謝っていれば大事には至らなかつたらう。しかし彼の態度はSIGのメンバーの怒りに火をつけた。健二はこう主張したのだ、自分は何も悪いことは言っていない、ただ貴方たちと友達になりたいから、親密に友好的な書き込みをしたのだ、それなのに、なぜ非難を受けなければならないのか、と。

その騒動はそのネットの管理人も出てくる騒ぎとなった。管理人は健二に、そのSIGは古参のなわばりのようなもので、健二になわばりを侵されたから彼らは腹を立てているのだと説明した。しかし健二は釈然とせず、持論を展開した。小学校では、みんなと友達になりましょう、と学んだんじゃないのか。なぜ、あなた方は大人なのに、子供のころに学んだことを実践できていないのか、と。当然ながら、健二の意見は聞き入れられず、彼は非難を浴びた。退会処分にはならなかったが、彼は自らそのネットから去った。

健二は、絶望した。なぜ、彼らはあんな態度を取ったんだらう。小学校でみんなと友達になりましょう

と学んだのは事実だし、皆、そうしてきたじゃないか。なぜ今それが出来ないのか。なぜ、それを屁理屈だと言って聞き入れてくれないのか。もしかすると、彼らは皆、自分が期待していたような存在ではないのかもしれない。アイデアの世界を目指していないのかもしれない。大人たちは皆、アイデアを理解し、心がきれいで神聖だと思っていたが、それは僕の思い込みに過ぎなかったのかもしれない。そう思い健二は、急に目の前が真っ暗になった。僕の思い描いていたアイデアの世界を、実は皆は描いていない。僕が社会に対して信じていた前提が、崩れてしまった、そう思った健二は、急にこみ上げてきた不安にさいなまれた。

健二はその後、他のいろいろな草の根ネットにアクセスし、様々な種類の掲示板を見て回った。政治や社会問題などを議論する掲示板では、意見の分かれる様々な問題で、自分と意見の異なる相手に誹謗中傷をぶつけている様子をあちこちで見つけた。

その議論の流れを眺めながら健二は思った、文字だけのコミュニケーションは恐ろしい、こんな罵詈雑言を言えるなんて。仮に目の前に相手がいたら、こんな風には言えないはずだ。同時にこうも思った、お互いの顔が見えない環境だからこそ、言いたいことが言いやすい、だからここに書かれていることこそが、彼らの本音なのだ。健二は、自分が感じた失望感は、間違っていなかったのだと改めて確信し、小さなため息をついた。それでも健二は情報交換のためにしばらくはパソコン通信を続けていたが、徐々にアクセスを減らすようになっていった。

パソコン通信上で健二が起こした事件が一段落ついたある日、急に健二の胸に、言いようのない寂しさがこみ上げてきた。一瞬のうちに、感情の渦が健二の体中を駆け巡った。

僕は大学に友達がおらず、ただ講義を受けに行くだけの毎日で、ずっと孤独だった。でも、パソコン通信を始めてから、ネット上でいろんな人と出会い、友達と呼べる人も出来た。それなのに、僕の言動が原因で議論を起こし、迷惑をかけてしまい、また僕は孤独になった。ネット上でも大学でも、僕は友達といえる人を作れなかった。寂しい。ものすごく寂しい。でも、人が怖い。

あまりの感情の激しさに息苦しくなり、立ってられないほどだった。

その場の発作はほどなくしておさまったが、健二はこの後たびたび同じ発作に襲われた。寂しさが日増しに募るようになるにつれ、発作が起きる頻度も増していった。多い日では三回ほど発作に見舞われた。

堪えられなくなった健二は、ひとつの決心をした。それは、大学で友達を作ること。そのために彼が取った行動とは、無差別に友達に話しかけることだった。

健二は思った、おかしなことを言って恥をかいてしまうかもしれない、しかしもうそんなことを言っている場合じゃない、どれだけ恥をかいてもいい、友達が欲しいんだ。

それから健二はキャンパス内で道行く学生に片っ端から話しかけるようになった。面識のない人に話しかけられた学生は最初サークルか何かの勧誘かと思う。しかし友達になってくれという話だと分かれると得体の知れない恐怖を感じ、うまく言葉を選んで、話を切り上げ立ち去ってしまう。もし仮に、健二がもっと好青年だったなら、友達になってやろうという人も現れたかもしれない。しかし健二は勉強ばかりしていた人特有の陰湿なオーラが出ており、健二が話しかける、髪を染めているようないまどきの若者とは対極にいた。

ほどなくして、おかしな学生がいると健二のことがキャンパス内で評判になるようになった。良かれ悪かれ評判になったのだから、いくら健二が陰湿でも、からかい半分に話しかけてくれる人が出てきてもよさそうなものだ。しかし、いまどきの大学生にそこまで物好きはいないらしく、健二に話しかけてくる者は相変わらずいなかった。しかし無視されるわけではなく、健二の方から話しかけると、無難な受け答えはしてくれた、しかしそれだけだった。大学生とは、どこまでも無難な存在だと健二は痛感した。

健二は落胆した。ただ、失望もそれほどしなかった。最初から友達が出来ることなんて期待していなかったのかもしれない、健二はひとり思った。ただ、最初の発作は、既におさまっていた。何も得るものはなかったけど、行動を起こすことで発作を止めることができた、それだけで健二は満足だった。

健二はその後、夜の町をさまようようになった。といっても自転車で町並みを見て回るだけで、居酒屋やファミリーレストランなど、夜出歩く人が入りそうな店には入らなかった。対人恐怖の健二にとって、そんな店にはとても入れなかった。特に酒場は、恐怖の対象だった。健二の知識にある酒場のイメージといったら、ニュースでよく報道される、ぼったくりバーくらいのものであった。

健二の母は、健二が夜中に黙って外出するのを知っていたが、黙認していた。風俗にでも行っているのかと思い、わが子も大人になったと、ほんのり嬉しく思っていた。

その日健二は、夜空に広がる満天の星をながめていた。

彼の住むマンションから国道に出て南にしばらく下ると、周囲は一面の田んぼになる。健二は適当な場所を見つけて自転車を止め、田んぼのあぜ道に座り込んだ。梅雨の明けない七月の晴れ間の夜、湿った風が彼の頬をなでる。街灯のある場所から離れ足元を照らすのは半月の明かりのみになった。空では無数の星々が、地上では団地の棟々の規則的に配置された蛍光灯が遠くでかすかに輝いていた。用水路の水が流れる音が、健二の心にしみわたった。水の流れる音はいい、僕にアイデアの世界を思い出させてくれる、彼は思った。

健二はしばし頭をからっぽにし、周囲の音に耳をすませた。遠くで蛙の鳴き声が断続的に響く。数分に一台通るかどうかの車はその鳴き声をかき消す。

また、蛙の鳴き声が響く。

蛙の鳴き声が一時的にやみ、水の流れが響く。

遠くでコンクリートを打つような音、自身の胸の鼓動が耳の奥で響く。

健二は常に何かの考え事をする癖があった。道を歩いていても、自転車に乗っていても、湯船につかっていても、いつも、何かを考えていた。考えていないとだめになる、そんな強迫観念に駆られていた。そんな彼も今ばかりは、夜の闇と自然の音に包まれ、頭をからっぽにせずにはいられなかった。頭を働かせていると、頭でしか周囲の物事を知覚出来ない。頭をからっぽにした途端、全身で知覚出来るようになる。夜の暗闇の中、健二は全身で周囲の音を受け止めていた、たまに湧いてくる「ああ、僕は今アイデアに近づいているんだな」なんて理屈めいた考えが止まっている間は。

しばしの間、健二は寂しさを忘れることが出来た。しかし彼は思っていた、これが僕の求めていた答えではない、と。こんなものは鎮痛剤でしかない、僕に必要なのは、僕のこの寂しさを根本から癒してくれるものなんだ。

健二は、その寂しさを癒してくれる「何か」を求めて、その後も夜な夜な自転車で町をさまよい続けた。

勝代は生まれてこの方、様々な問題を抱えていた。誰に迷惑をかけても、勝代は知らん顔で謝ろうとしなかったから、当然と言えば当然かもしれない。そのため、勝代は極力人に頼らず、全てを自分でやろうとするようになっていた。しかし、一人で全てをするのは、かなりしんどい。事実、勝代はかなり無理をしていた。しかし、人生というのは辛いのが当たり前なんだ、皆、口に出さないだけでこのくらいの苦しみは味わっているんだ、勝代はそう思い、ずっと堪えてきた。そして、自分が苦しみに堪えているからと、健二にも苦しみに堪えることを、無意識のうちに強要していた。健二に冷たくあたる勝代の背景には、自分の苦しさがあった。

そんな苦しみのせいか、勝代は、とある新興宗教に入っていた。「護摩の会」という教団で、その団体の拠点は「道場」と呼ばれた。健二も幼い頃からよく道場に連れて行かれた。毎月の集まりの日には、本部からのビデオ中継で教祖の顔が映し出され、それにあわせて皆で仏教っぽいお経をあげていたのが印象に残っている。また、廊下に教団の活動の写真が張られていて、修養と呼ばれる山歩きをしている信者達の写真がよく目に留まったが、修験道の格好だと健二は思った。実際には密教をベースにしているのだが、健二にはそれほど宗教の知識はなかった。

勝代が護摩の会に入信したきっかけは数十年前、彼女の弟、孝之《たかゆき》が誘ってきたことだった。当時孝之は大学生で、様々な勧誘を受けていたが、小心者の彼は、断りきれず、あちこちの宗教や団体に誘われるがまま足を踏み入れてしまっていた。そんな孝之を、家族は誰も責めなかった。当時の勝代の家庭では、誰もが悩み苦しんでいた。短大を出て就職した勝代も、仕事場でなかなか人間関係が作れず悩んでいたし、勝代の母幸恵も、夫のことで悩んでいた。救いを求めているのは、勝代も幸恵も一緒だった。幸恵の夫は宗教が嫌いだったが、仕事一筋で家庭には給料をきちんと入れるものの、飲んで帰った後の夫婦喧嘩以外には家族とのコミュニケーションは無く、孝之の入信を知ることはなかった。

勝代と幸恵は孝之の誘いに応じて、すがるようにして護摩の会に入信した。勝代にとって宗教といえば、それまでは仏壇と神社の初詣くらいしかなじみがなく、護摩の会の説く教えは、とても新鮮なもののように耳に入ってきた。修行によって悟りを開くこと、そして超絶的な力を得ること。そのためには先祖から受け継がれてきた因縁を知り、供養をすること。

勝代は修行を続けた。修行といっても、難しいものではない。下座行、つまり道場の掃除や炊き出しのお手伝いをしたり、決められた時間に決められた手順でお経をあげたり、そんなものだった。修行をしている間は、日常で感じる苦しみや苛立ち、寂しさを忘れることが出来た。人間関係の苦手な勝代だったが、教団内での会話は、修行に関する専門的な話題ばかりだったため、困ることはなかった。幸恵は、下座行さえ苦痛に感じて関わる事が出来なかったが、教団への献金など、可能な範囲で活動を行っていた。

その後まもなく孝之は護摩の会を退会した。護摩の会は自分の望むものでないと分かり飽きてしまい、代わりに友人からボディービルのジムに誘われ、ベンチプレスの機器を一式購入し、身体作りに熱中するようになった。孝之は、勝代と幸恵にも退会を促したが、彼女達は応じなかった。

勝代と幸恵は、結束を固めていった。いわば家族の絆といえるものを、護摩の会を通じて、初めて実感することが出来た。勝代はその後結婚し、宗教嫌いの夫から疎まれたが、活動を減らしはしたものの護摩の会は続けていた。夫に内緒で幼い健二をたびたび道場に連れて行った。

健二が思春期になり、悩み事を勝代に相談したとき、勝代は護摩の会をすすめた。健二はそこに行って言われたとおりに祈り続けたが、何も変わらない気がした。健二は、勝代と違い、内省的な人間で、悩み事には徹底的に頭を使って理性的に考えており、ひたすら祈り続けると何物かが助けてくれるといった考え

方には、どうしても納得できなかつた。

勝代は健二によく言った、お前が苦しいのは、先祖や自分の前世からの因縁によるものだ、だから因縁を解くために、供養し、祈り、懺悔することでその苦しみを早く終わらせることが出来る、と。それでも健二は、腑に落ちなかつた。それじゃあなぜお母さんは、そんなに苦しそうなのか、因縁を解く為に修行をしているお母さんがそんなに苦しんでいるなら、修行をしていない一般人はもっと苦しいはずじゃないか。健二はある時そのことを母に言った、すると母はこう返した、あなたが世間知らずだから分からないだけで、ああ見えてみんな私達より苦しんでいるんです。世間を知らない健二はそれを言われると反論のすべはなかつた。しかし、母がこれだけ苦しんでいるのは正常なことではない、そのことは感じていた。

最近の勝代は、護摩の会の中でさえも孤独を感じているように健二には見えた。健二は毎月の集まりに年に数回母に連れられて行くのだが、あれだけ信者が集まっているのに、勝代は誰にも挨拶をしなかつたし、誰にも声をかけられなかつた。勝代が一番熱心だったころの信者はもう教団を離れてしまったらしい。

勝代の部屋には護摩の会のための祭壇があり、座敷にある仏壇とは別に手入れがされている。部屋の奥にある本棚にはカーテンがかけられており、カーテンを開けると、護摩の会の出版する本の他に、密教に関する本や、占星術の本など、宗教や占いに関する本であふれかえっている。

それから数週間が経過し、大学は夏休みになった。健二が外出するのは、夜中に自転車で町を徘徊するときだけになってしまった。

勝代は、相変わらず家にいることが多かった。不動産を所持し、家賃収入で働く必要がなかった彼女にとって、日々の仕事といえば、主婦業とたまにある不動産の事務的な仕事だけだった。時間を持て余した勝代は、しばしば健二の部屋にノックも無く入ってきては脈絡のない文句を言うことで暇つぶしをしていた。

その日も勝代は健二の部屋に入ってきて、健二を勝代の前に座らせて、脈絡のない話を始めた。社会に出るのがいかに大変か、健二がいかに甘えているか、健二が社会に出るには、今のように感情を表に出すようではだめで、もっと感情を押し殺さないといけないこと、健二はもっと機械のようになるべきだということ、機械なのだからどんなことでも言われたら逆らわずに従うべきだということ、だからまず手始めに目の前の人間である勝代に逆らうなということ。勝代は言いたいことだけ言うと去って行ってしまった。

健二は勝代の態度にうんざりしていた。健二のためを思っていつているのだろうが、勝代のこうした態度が健二を吃音にし、対人恐怖にした。それなのにまだ続けるのは、緩やかに子殺しをしているのと何ら変わらない。

勝代はお酒もタバコもやらないので、ストレスのはけ口をなかなか見つけられないでいるのだろう、しかし勝代には、車に乗り買い物を兼ねてドライブに行ったり、占星術で自分や他人の運命を占ったりする趣味があった。だから自分の趣味に没頭し、こちらにかまわないで欲しいのに、と健二は思った。

勝代は外出するときは、近所であってもブランド物に身を包んで出かけ、外車に乗っていった。八百屋の前の駐車場に大きな赤のBMWが止められ、ヴィトンのバッグを持った中年女性が店の中に入っていく様子は、傍目に見ても違和感がある光景だった。

趣味の占星術の方は、様々な本を読み、自分なりの法則を見つけ出して占ってきた。ただし、的中率は健二から見てもあまり良くはない。あるテレビで見た芸能人に対して数年前に「占ってみたけど、この芸能人は今年までだ」と健二に言ったが、その芸能人は今でも活躍しているし、「年内に離婚する」といった芸能人カップルは長続きしたし、そんなことばかりだった。勝代は自分の非を認めたくないで、占いが当たらないたび、その都度占い方を変え、今度は当てると意気込んでいた。そして毎回、的中率が上がっていると本人は言っているが、正直健二にはそうは見えなかった。そもそも、九星気学にせよ四柱推命にせよ、占いというのは統計学だ。過去の経験則に基づいて作られたものなのだから、未来に必ずしも当てはまるとは限らない。勝代がそれでも占いにこだわるのは、自分の将来が不安だからなのだ。宗教にすぎるだけではまだ不安なので、占いで不安をより和らげたいのだ。

ブランド物に身を包まないで不安で、宗教と占いにすぎると不安。つねに勝代の周りには不安がつきまとっている。そして人間は不安になると、しばしば視野狭窄になる。なにか不満を見つけて、そこに文句を言うことに専念することで自分の不安を忘れよう、紛らわそうとする人がいる。今の勝代は、まさにその心理で健二を罵っている。息子のためを思って、という大義名分とは裏腹に、自らの不安と向き合うのが怖いから、健二に社会に出る、就職のために機械になれと、毎日のように言っている。

健二は勝代の苛立ちが伝播したのか、徐々に日常的にイライラを感じるようになっていった。これまでは意識して受け流すことができたのだが、勝代が健二に向ける苛立ちが増大したのか、夏の暑さのせいなのか、さすがの健二も受け流すことが困難になっていた。

イライラは波のように押し寄せ健二を苦しめた。イライラが止んでいる間は言いようのない寂しさが健二の心を支配し、イライラと寂しさに交互にさいなまれる日々が続いた。



そんな健二を受け入れてくれるのは、夜の町だけだった。健二はほぼ毎日夜の町を自転車で徘徊するようになり、その時間も長くなっていった。

その日も健二は深夜の町を自転車で回っていた。夏が終わりに近づき、秋の訪れを告げるかのように、鈴虫やおおろぎの鳴き声が住宅街や道路、あらゆる場所に響き渡り、冷たくなってきた空気とともに、町全体を物悲しいムードで包み込んでいた。健二はいつものように地図を持たずに気の向くままに、自転車を走らせていた。

健二は、とある団地にたどり着いた。その団地に来たのは、その日が初めてだった。六十棟ほどの住宅棟が立ち並ぶ、大きな団地だ。健二は、その敷地内に入り、歩き回った。住宅棟の間をくぐりぬけ、小さな公園や駐車場を抜けた。団地の敷地内では、どこにいても街灯が足元を照らし、夜の安全が保たれていた。

大きな広場に出て、健二は立ち止まってしばし辺りを見回した。左右に整然と並んだ住宅棟の群れを月明かりが照らし、その輪郭をぼんやりと見せた。時は深夜、窓からの灯りは十五階ある棟でも数えるほどしかついていなかった。月の影になったビルからは通路側の蛍光灯の灯りが漆黒の闇の中で見るものの目をくらまさんとばかりに整然と輝いていた。

ふと健二は、廃墟の町を思い出した。そして思った、ここは確かに廃墟だ、たくさんの建物があり、人が住んでいた痕跡も残されている、しかも誰にも出会うことはない。この町の住人はどこに行ってしまったのだろう。警報が発令されて、どこかに避難してしまったのだろうか。だとしたら僕は一人取り残された孤独な男だ、寂しい、ああ寂しい。

寂しさに堪えきれなくなり、健二は歩き出した。広場の一角には連なるビルの一階が店舗になった商店街があり、通路を挟んで公園、その反対側には幼稚園と集会所があったが、いずれにもひとけはなく、しんと静まり返っていた。

十五階建ての棟の入り口は十二畳ほどの広さがあり、各部屋ごとの郵便受けと二台のエレベーター、非常階段があり自転車置き場の入り口があり、蛍光灯の灯りで照らされていた。隅の方には、子供用の自転車や砂遊びに使うスコップ、捨てられたピザ宅配のチラシなどが無造作に散らばっている。健二はそれらをしばし無言で眺め、胸の中にこみあげる寂しさを再確認した。

健二はあてもなく歩き、幼稚園の前にたどりついた。側の街灯が、園庭のジャングルジムやブランコを照らしていた。園の内外はフェンスで仕切られており、中の様子をうかがうことが出来た。きっと昼間に来れば元気に駆け回る園児達を見ることが出来るのだろう。コンクリートで出来た二階建ての園舎からは、火災報知器の赤いランプと非常出口の緑の光が漏れ、暗闇の中でお互い自己主張しあっていた。

健二は、自分が幼稚園の頃のことを思い出し、それが寂しさと化学反応を起こし、急に胸の鼓動が早くなり息苦しくなった。

思わず健二は幼稚園のフェンスを乗り越え、園庭に向かってジャンプした。なぜそんなことをするのか、健二自身にも説明は出来なかったが、それでも、そうせずにはいられなかった。健二は思った、不法侵入だ、警察に捕まる、でも捕まってもかまわない。今、僕が行動を起こした結果、捕まったら捕まったで、何か変化を起こせるはずだ。健二は、そう考えつつも同時に「もし誰かに見つかったら、帽子が風で飛ばされたから拾いに行つたと言いつつ逃げよう」などと逃げ道もしっかり準備していた。

健二は園庭に飛び降り、しばらくの間、園庭を歩き回った。健二の目に留まるのは、幼稚園児のサイズに最適化された数々の用具だった。遊具、水のみ場、靴箱、それらがおしなべて、ここが幼児のために準備された場所なのだと言いつつ主張しているようだった。

時間にして十分弱だった。健二は先ほどと同じようにフェンスをよじのぼり、非日常の園庭から日常の団地へと戻ってきた。

健二はしばらく立ち尽くしていた。園庭にいた間は誰かから目撃されないか不安のあまりせき止められていた思いが、ここであふれ出してきた。

健二の脳裏に、幼稚園に通園するときに見た朝の日差しが浮かんだ。そして、友達と一緒に歓声を上げて騒ぎあって遊んだこと、歌を歌い、じゃれあい、たまにはけんかもしたこと、いろんな情景がこみ上げてきた。

そして、健二に強い思いがこみ上げてきた。

「僕は子供が好きだったんだ。いや、子供にあこがれていたんだ。いや、それも違う。子供になりたいんだ、いや……」

とにかくこの世界にこそ、僕の求めている世界がある、健二はそう悟った。それは健二が見たアイデアの世界と見た目は違うが、心の根底から通じるものがある、と健二は思った。古来、天使の絵を描いた画家たちが子供をモチーフにしているが、彼らは僕が感じたことと同じことを感じているのだ、と健二は理解した。健二はあまりに急に悟りをひらいたせいで、その場に立ちすくんだまま動くことが出来なかった。健二の自転車は彼の側で止められたまま、周囲の景色と同化しているようだった。

しばしの熱狂がおさまったあと、健二はゆっくりと自転車を押して歩き始めた。健二の中では、また元の寂しさがわきあがり、彼を支配し始めていた。健二は確かに自分の求める物を見つけた気がした、しかし、その世界の実現のために何が出来るのか分からなかった。保育士になって子供と関わるのは、健二には無理そうだし、結婚して妻子を持つのも先の話だろう。

そんな思いをかき消さんとばかりに必死に歩いていると、公園のベンチの上にある黄色いものが健二の目に留まった。近づいて確かめると、それは幼稚園の鞆だった。街灯の薄暗い光が支配する中、黄色い鞆は不思議な輝きを放っていた。

「置き忘れたんだな。持ち主は、きっと困っているはずだ」

鞆にはマジックで、その子の名前がひらがなで書いてある。何か住所を確認できるものはないかと、健二は鞆を開けた。中には出席のスタンプを押す冊子と弁当箱が入っていた。冊子に住所が書いてあった。49棟の203。団地の中に住んでいる子だ。「届けなきゃ」そう思った健二は、その鞆を前のかごに入れ、自転車を走らせた。

団地の棟番号は建物の側面に書かれているが、暗くて見えない。仕方なく、健二は一棟一棟入り口を確認しながら次々に見て回った。時間は既に午前4時になっており、新聞配達が始まっていた。同業者と勘違いされ、おはようございますと、声をかけられた。健二も、小声であいさつを返した。

そしてついに49棟を見つけた。鞆に書いてあるのと同じ苗字が203号室にあるのを郵便受けで確認した。健二は、住民を起こさないようにそっと歩きながら階段を上り、そして203号室の前まで行き、鞆をそっとドアの前に置いて、また足音を立てないようにしながら、棟の入り口まで戻ってきた。

既に空は白み始めている。健二は、一瞬だけだったが、アイデアの世界とつながれたような気持ちがあった。熱気覚めやらぬまま、健二は家路につくことにした。

帰り道、健二の心には、再び寂しさがこみ上げてきた。僕は小さな親切をしたけど、あの子の家族は僕が届けたことを知らないままだろう、結局何も変わらなかった、健二はそう思った。でも、その寂しい気持ちになんとか愛着を感じ、手放すのが惜しいと思い始めた。寂しい寂しいと僕はいうけれど、その寂しいという感情だけは、いつも僕と一緒にいてくれた、これからもずっと一緒でもかまわない、そんな気持ちになった。不思議な感覚だった。でも悪い感じではなかった。結局、何も変わらなかったのかもしれない、でも、自分の求める理想の世界に、少しだけでも距離を近づけられたような気が健二はした。

その夜を境に、健二には心に余裕が出来ていった。それまで、イライラと寂しさにさいなまれていた健二だったが、徐々に感情が安定することが多くなっていった。母に何かを言われても、それほど気にする

ことがなくなっていった。

二週間後のある日、健二は空を眺めていた。澄み渡る秋の高い青空に、白い雲がうすく長くのびていた。風はないが空気が肌寒く、照りつける日差しが心地よく感じられた。健二の心もまた、この日の空のようにすっきりしていた。以前は夜中にしか自転車を回さなかった健二だが、こうして昼間に外を散策するのも悪くない、そう思えるようになっていた。

その一週間前、健二は大学に退学届を出していた。勝代は健二が退学届を出したことをその日の晩間かされ、怒り狂っていた。もうお前を助けることはしない、自分の力で生きていけ、などと勝代は捨て台詞を吐いたが健二は意に介さなかった。見捨ててくれるならありがたい、それが望んだことだ、と健二は思っていた。

健二は退学届を出す前夜、いつもの夢を見ていた。健二がイデアと呼ぶその世界には、通貨が存在せず、皆が喜んで与えられた使命を果たしていた。その晩、健二は蓮の花の咲く庭園にいた。そこに一人の少女が近づいてきた。羽衣のような、しかしスモックのようにも見える服を着て、髪はおかっぱ頭、身長は4～5歳の子供ほどで、黄色い鞆を肩にかけていた。健二はその鞆に見覚えがあった。

少女は何も言わずに、木の実を差し出してきた。鞆を届けたお礼なんだ、と直感的に理解した健二は、木の実を受け取り口にした。一口かじるや否や、体中に力がみなぎり、光に包まれていくような感覚を覚えた。

そこで健二は目を覚ました。暗闇の中、デジタル時計の午前4時の表示が光っていた。健二の瞳の奥には、まだ夢で見た強い光が残っていた。急に、健二の全身を様々な考えが駆け巡った。長年抱え込んできた、鬱積した思いがマグマから吹き出る溶岩のように一気に流れ出した。このまま大学にいたら、いつまでも母の言いなりになる、自分で動き出さなければならない、そう思い、気持ちが焦った。そして休火山はついに噴火した。

「やめなきゃ、大学なんて、こんなことしている場合じゃない」

健二は、思わずつぶやいた。

健二は夜が明けてすぐ後期日程が始まる直前の大学に向かい、即座に退学の手続きを取った。健二は事前に誰にも相談しなかった。相談する相手もいなかった。

健二は退学手続きを取って母を激怒させたあと、その後のことを何も考えていない自分に気づいた。健二は元来慎重な性格で、石橋を叩いて渡るところか叩きすぎて壊してしまいかねないほどだっただけに、今回勢いだけで退学手続きを取ってしまったことには健二自身も驚いていた。しかし不思議と後悔は無かった。

それから数日の間、勝代は機嫌が悪かった。これからどうするのだ、就職しろ、と問い詰めても健二が意に介さなかったからだ。健二はもはや母からイライラさせられることはなくなっていた。勝代の方も、口では文句を言うものの、健二を追い出そうとはしなかったし、食事もきちんと作った。勝代自身が、働かずに家賃収入で食べている身のため、後ろめたい部分があったのかもしれない。

健二は何とかなるという確信が心のどこかにあったものの、その確たる根拠はなく、これまでと大して変わらぬ日々を過ごしていた。変わったことといえば、夜中に自転車散策していたのを、昼間もするようになったことだけだった。言い換えれば、大学に行く代わりに、昼の町を散策するようになったわけである。

健二は肌寒さと日差しの中、空を眺めていた。徐々に様々な考えが頭の中を泳ぎ出し、同時に腹の底から自信がこみあげてくるのを感じた。

「そうだ、僕はやれる。まもなく、僕にぴったりの生き方が見つかる、絶対に、間違いなく。僕が夢で見たイデアの世界の住民は、きっと僕を助けてくれる」

根拠のない自信は、頼るものがない彼を奮い立たせた。

健二が夕方家に帰ると、孝之が来ていた。孝之は勝代の弟で、健二の叔父にあたる。

孝之と勝代はソファーに腰掛けて話をしていた。この家に誰かが来るのは珍しいことだ。それは親戚も例外ではない。勝代の家庭では盆や正月に親戚一同で集まるという習慣が無かった。

孝之は宅建の資格を持っており、以前は不動産屋に勤めていた。しかし、人間関係でトラブルを起こすことも少なくなく、たびたび職場を変え、その後フリーで自分の不動産屋を開業していた。勝代との仲は、悪くもないが別に良くもなかった。それでも、土地の取引に明るい人間が身内にいるのはありがたいと勝代は思い、その点は頼りにしていた。現在勝代が家賃収入を得ているマンションを購入する際にも孝之が仲介したと健二は聞いている。

健二が側のテーブルに腰掛けて聞いていると今勝代が持っているアパートの老朽化の話や、新しい土地の購入を検討する話など、勝代のために孝之が土地の話をしているようだった。

話の途中、勝代がトイレに行っている間に、孝之は健二を呼び出すと、小声で話した。

「健二君にいい話があるんだ。時間を作って話をしよう。いつか、うちの事務所に来てくれないかな」

孝之の事務所は、都心の駅から歩いて五分の場所にあった。健二は中に入ったことはないが、近くは何度も通っているので場所は知っていた。

「ええっと、はい、じゃ、一応」

健二は曖昧に答えた。先ほどの根拠のない自信から一変、人に会うと急に曖昧な返事しか返せなくなるのが、健二の問題点である。

健二は孝之に都合のいい時間を聞いた。そして勝代がトイレから戻ってきたので、話はそれまでにした。

孝之が帰った後、健二の胸に大きな喜びの大波が打ち寄せた。

「孝之おじさんが、来てくれて、ついに、やってきたんだ！待ち望んだ、大きな変化を起こせるチャンスが……」

健二は、孝之が全てを助けてくれると信じて疑わなかった。

「ちょっと飲み物買ってくるから待ってて」

孝之は健二にそう言って事務所を出て行った。一人事務所で留守番することになった健二は、事務所をしばし見回した。

古アパートの一室。窓にはブラインドがおろされ、隙間から見える外の光景は、蔦の絡まるブロック塀だけである。その風景を確実に隠すためか、カレンダーがブラインドの上にかけてられている。並んだ机の上には事務処理用のノートパソコンが二台、そして整然と片付けられた書類の束。壁に立てかけられた移動式のホワイトボードには今月の予定が雑然と書き込まれていて、それなりに仕事に困っていないのをうかがわせる。健二がかけている、来客用の大きくて黒いソファは牛革ですわり心地がいい高級品で、明らかにこの部屋には不釣り合いだ。そういえば小さい頃実家で同じものを見た記憶がある。きっと、祖父の形見分けでもらったものだろう。ソファの前のテーブルには、来客用の灰皿が置かれている。孝之がタバコを吸わないのを健二は知っていた。そのため事務所にもたばこの匂いがしないのは、健二にとって好感が持てた。

孝之が戻ってきた。アイスコーヒーを二本買ってきていた。晩秋とはいえまだ昼間は汗ばむ陽気、孝之はそのあたりは気が利いていた。孝之は健二を前にして、おもむろに話し始めた。

「健二君、今の世の中は間違いだらけだ。そう思わないか？」

そう言って孝之は、社会の様々な問題の話を始めた。その話には、健二は興味深く聞き入った。

健二の方にも胸のうちで抱え込んでいたものがあつた。社会に対する疑問、それは夜の町を自転車で散策しながら、よく考えることだった。なぜ、世の中は、アイデアの世界のようにならないんだろう、お金のために悪いことをする人が絶えないんだろう、経済のために環境を犠牲にしても、誰も文句を言わないんだろう。車メーカーはエコな車を作るというけれど、車を作ったり売ったりするのを減らすことが一番のエコじゃないか。

しかし健二にはそれまで相談相手がいなかった。勝代に話しても「えらそうなことを言うな」と言われていたので、自分には言う資格はもちろん、考える資格もないとばかり思っていた。孝之の話を聞きながら健二は、おじさんこそが自分にとって、初めて心を開ける相手かもしれないと感じ、興奮していた。

ひとしきり話がすんだ後、孝之は健二を台所に連れて行き、浄水器を見せた。そして水道水をそのまま飲むことがいかに体に悪いか説明した。

「これなら、市販の浄水器では通してしまう有害物質もたくさん濾過できるんだ」

「へえ、凄いですね」

健二は心底感嘆して言った。健二は、社会問題を語り合える人を見つけたことによる熱気が冷めていなかった。

次にノートパソコンの前に行き、モニターの電磁波を遮断する薄いシートを見せた。

「このシートがモニターから出る有害な電磁波をカットするんだ。僕はこのシートをつけてから長時間作業しても、目や肩が疲れることが少なくなったんだ」

孝之は他にも、いくつかの品物をダンボールから出して見せた。鍋や調理器、シャンプーなどだった。どれもお店には売っていない、素晴らしい物だという説明は忘れなかった。そして、孝之は健二に言った。「実は僕は、不動産屋とは別に、これらの品物売る仕事をしているんだ。この仕事は、これまでの企業とは違う、全く新しい雇用形態なんだ。ここでは、本当に素晴らしい製品を作っている。しかし、テレビなどでCMはしない。広告費が高騰してしまうからだ。本当にいいものなんだから、宣伝はいらない。代わり



に、一人一人が口コミで広めていくことになっていて、僕もその一人なんだ。もともと僕は不動産の会社で頑張ってきたが、そんな所で働くのが本来の生き方じゃないと思いはじめ退職したんだ。土地に線を引いて所有者を右から左に動かしてお金をもらうより、地球環境のために、人間の健康のために生きる方が、遥かに人として正しいと思うんだ。今は不動産と兼業でやっているが、そのうちこっちに一本化できたら、と考えているんだ。」

そして孝之は、改めて健二の方を向いて最高の笑顔で言った。

「今週末に、近くでセミナーがあるんだ。この仕事をしている先輩達とも話が聞けるから一緒に行かないか」  
健二は快諾した。

健二は帰り道でも熱気が冷めなかった。相談相手を見つけたこと以上に、孝之おじさんが社会批判をしていたのを見て、自分にもそういうことを言う資格があるのだ、勝代の顔色など伺う必要はないのだ、そう悟ったからだった。そしてセミナーで流れが変わる、孝之おじさんの勧めるセミナーとはどんなものだろう、きっと、アイデアの世界に近づけるに違いない、健二は期待していた。

孝之は不動産会社を退職したと言っていたが、本当に自らやめたのか、やめさせられたのか、健二は図りかねていた。しかし、大きな期待感が、その不安に勝っていた。

セミナーの会場は、ビジネス街の雑居ビルの中だった。健二がエレベーターで会場のあるフロアに降り立つとそこには立派なじゅうたんが敷かれており、雑居ビルの中に突如高級ホテルの入り口が現れたかのようだった。

会場となる部屋にはパイプ椅子が並べられており、百人以上が座れるようになっており、既に五十人くらいが着席していた。男女比は半々くらいで、ビジネススーツを着た人が目立つ一方、どこにでもいる主婦や休日のサラリーマンのような普段着の人も少なくなかった。皆、この会員か、入会を希望する面々だろう。

健二に少し遅れて、孝之がやってきた。健二と孝之は隣り合って座った。次々と参加者が訪れ、ほぼ満席になった。

セミナーが始まり、主催者が出てきて挨拶をしてから数人がこの会社の製品について演説を始めた。ある者は市販のボディソープには有害物質が多いがこの会社のものは安全であることを、他の者は地球環境の現状を訴え、環境保護のためにこの会社が行っている活動を報告した。健二は、それを聞いていて、少なくとも悪い気はしなかった。それまで勝代に企業に就職しろとさんざん強制されていたが、健二は既存の企業には全く魅力を感じていなかった。それだけに、どんな形であれ、それ以外の道があると知っただけで救われたような気がしていたのだ。

しかし、その希望はすぐに失望に変わった。セミナーが中盤になり、主催者が今度はシステムの説明を始めた。会員が品物を売るとお金が入ってくる、知り合いを勧誘して入会させると、その会員の稼ぎの一部も勧誘した側に入ってくる、だからたくさんの人を会員にすると儲かるといったシステムが紹介された。健二はそれを聞いて、眉をひそめ、そして思った。

「もしかして孝之おじさん、自分の儲けのために、僕を勧誘したんじゃないか……？」

それに健二には友達といえる友達がおらず、ほかに勧誘できそうな人もいない。勧誘するほうが儲かるシステムなら、あまり有利ではないな、と健二は思った。

そして健二が決定的に失望したのは、終盤、儲かった会員が成功談を演説した時だった。それまでのつまらない生活がこの会に入って一変、ばら色の人生を送るようになった、という話ばかりだった。儲かって家を買った人、ボーナスとして外車をもらった人、お金、お金、お金。聞いていて健二は腹立たしくなった。そして急にアイデアの世界のことを思い出した。その世界に通貨は存在しなかった。一方この場所へのさばっているこいつらときたら、どうだ。しっかりした理想で信頼できると思ったら、その次にはお金の話ばかり。だいたい、ボーナスで車がもらえるって何だよ。都心に住んでるんだったら、公共機関使えよ、マイカーが地球環境を破壊するんだぞ。環境が大事とか言いながら、矛盾している。

こうして健二は、すぐに冷めてしまった。セミナーが終わり、孝之から声をかけられたが、健二は丁重に断った。孝之も強くは期待していなかったらしく「そう」とさりげなく言った。孝之は、帰りは車で送っていいか、どこか食事でも、と誘ったが、健二は辞退し、一人で帰っていった。

帰り道は、雨が降っていた。健二は、持ち歩いている折り畳み傘を差して自宅までの道を歩き始めた。健二の頭を、整理しきれない様々な考えが往来していた。

お金の無い世界ですごせれば、どんなに素晴らしいだろう、健二は思った。人々は自らの使命を持って喜んでその仕事を引き受け、そして生活に必要な全てを受け取る、夢の中で見たアイデアの世界の社会システムを、彼は思い出していた。

でも、と健二は思った。現実のこの世界でそれをやろうとしたって、残念だがうまくいかない。一番近い

のは共産主義かもしれないが、そこでは権力者ばかりに富が集中し、政治は腐敗してしまった。自分だけが幸せになりたいという欲望を持つ人は少なからずいる。共産主義は、彼らをのさばらせる結果に終わってしまったわけだ。それじゃ現行の資本主義が最高だと思っているんだらうか？それもまた違う気がする。そりゃ、他のシステムよりもましだという意見には同意するさ。しかし問題点も少なくない。だから、現状にとどまって新しいシステムを検討しないのも怠慢だと思う。

健二は土砂降りの道を歩き続ける。さらに雨は強くなり、健二の頭を駆け巡る思いも、激しくなった。

大半の企業は悪、就職は悪だと断言していい。スーツを着てあちこちの会社で面接を受ける学生達の姿を思い描くだけで反吐が出そうになる。それはまさに社会悪の歯車に取り込まれる様子だ。学生達はためらうこともなく、むしろみずから切望して社会悪に取り込まれようとする。そして彼らは社会悪の中に居場所を見つける。彼らの力が加わることで社会悪はより力を増す。そうした悪循環が繰り返されてきた。

この社会にのさばる企業の悪どさは、アイデアの世界と比較すればよく分かる。必要のない機械を生み出し、人間から思考力を奪い機械にしていく。そして機械を動かすために限りある資源をどんどん無駄遣いしていく。誰もが気づいているはずなのに、声を上げる人は少ない。声を上げて、黙殺される。

健二は土砂降りの大通り沿いを歩く。車のライトが健二のもとを次々にゆっくりと通り過ぎる。ところどころに深い水溜りが出来ている。車のはねた泥水が健二の足元に二度、三度かかる。健二は苛立ちながら、なおも考えを巡らせる。

第二次世界大戦中、この国で戦いに反対する者がいれば、非国民と呼ばれた。臆病だから戦いに反するのではなく良心に反するからだと言っても誰も聞く耳を持たなかった。今の僕にとって、就職をすることは良心に反する。しかしその意見は誰にも理解されないだろう。戦争については各国が徴兵制をとりやめ、兵役が残っている国でも良心による拒否が徐々に認められつつある。しかし企業への就職の良心的な拒否については、全く進んでいないどころか、殊にこの国では良心を捨てて企業に忠誠を尽くすことが求められる。企業に赴かない若者達を蔑む。中には無職青年に対して理解を示す人もいる。しかし、無職の方が正常で就職している人の方が異常なのだとか、無職の方が就職している人より望ましいという意見、すなわち僕が思う一番まっとうだと思ふ意見は、誰の口からも聞いたことがない。

誤解しないで欲しい。働く意欲がある人が働かないのはいけないことだ。僕が言いたいのは働くことに嫌悪感を覚える人は働くべきではないという話だ。誰にでも天職というやつはある。それを見つけてそこで働いている人はいい。彼らの目は輝いている。一方で、悪に曇ったこの社会では多くの人が天職を見失う。そもそも自分の天職が何かさえ見つけられない。皆、社会システムのせいだ。天職を見つけれず、目の前にある仕事に嫌悪感を感じる人たちは皆、働かずに引きこもれ、親のすねをかじれ、そうだ、それが正義なんだ。

健二は思わずさしていた傘を突き上げた。そして大声をあげた。その声は雨の音と車の音にかき消されて、通りを歩いていた誰も気づかなかった。

健二が家に帰り着いたときは、全身ずぶぬれだった。すぐにシャワーを浴び、着替えて温かいお茶を飲み、気持ちを落ち着けた。勝代は土地の境界線のなんとかの用事でまだ帰っていなかったが、晩御飯はきちんと準備してくれていた。

冷めた味噌汁を温めながら、健二は思った、雨にぬれていると、いつもはろくなことを考えない、でも、今日感じていた義憤は、きっと本物なんだ。僕は何とかしなくちゃいけない。出来ることが、あるはずだ。そろそろ自分に出来ることを、考え始めないといけない。

数日後、孝之は健二に電話で連絡をとってきた。また別の件で会わないか、今度は食事をごちそうする、孝之がそう言うと、健二は断る理由もなく、承諾した。勝代がいるので健二はなるべく家にいたくなかった。いい気分転換になりそうだし、食事をおごってくれるなら、なおさらだ、健二はその程度に考えていた。しかし、孝之が鬼気迫る口調で話していたことに電話越しの健二は気づけなかった。

健二が孝之に連れられ、到着した先は市内の中央にある大きなホテルだった。結婚式場やコンサートホールが完備され、フロントではシャンデリアと高そうな絨毯が迎え、あまりの高級感に、健二は身構えた。二人はそこのレストランに向かった。健二はホテルのレストランでの食事は初めてだった。

給仕が何人もおり、手際よく健二の着ていたジャンパーを預かってくれた。レストランの給仕なんて健二はテレビの中でしか見たことがなかったため、テレビのドラマで見る光景と同じだ、とひとり感心していた。

二人は窓際の景色のいい席に案内され、着席した。孝之は真剣そうな表情をしているように健二には見えた。ひよっとしたら孝之もこういう所にくるのは珍しいのかもしれない、健二は思った。

孝之はコースを二人分頼み、赤ワインを注文した。近くのテーブルでは、サラリーマン達が酒を飲みながら商談をしている。メニューを見るとコースは八千円から、となっている。健二は、こんな豪華な食事を一部のサラリーマンはしているのか、と思うと同時に、孝之おじさんの羽振りのよさを不審に思った。健二は勝代から、孝之の甲斐性のなさをいつも聞かされていた。

給仕がワインを二人のグラスに注ぎ、二人は乾杯した。孝之は一瞬笑顔を見せたが、またもとの真剣そうな表情に戻った。

お酒が入り、普段は無口な二人も、饒舌になっていった。最初はどうしてもいい雑談で会話が弾んだが、そのうち勝代の話になると一段と盛り上がった。

「姉さんみたいな人と一緒に暮らして疲れないかい？」

孝之が聞いた。

「はい、そりゃもう。人の部屋にはノックをせずに入るし、よく分からないことで腹を立てるし、気の休まる暇がありません」

健二は鼻息荒く答えた。

「姉さんは小さいときからそうだった。男勝りなくせに、自分が不利になると、急に気が小さくなる。それを隠すためにそういう時は、いつも怒りっぽくなるんだ。傍目に見ていて、一番迷惑で嫌われる対応だよな」

「そうそう。それで僕もおかしくなっていました」

アルコールが入りさらにテンションを高めて健二が言った。

「僕も姉さんにはうんざりしているよ。でも小さい頃はなすすべがなかった。大学生になって東京の大学に行き、そこで姉さんのもとを離れてから初めて、いかにあの女が狂っているか気づいたんだ。」

「……僕も勝代のもとを離れて一人暮らしでもした方がいいでしょうか。」

少し間をおいて襟を正すようにして健二が尋ねた。

「そうだなあ……」

孝之も声のトーンを落ち着け、言葉を選びながら言った。しばし沈黙が走る。

二人は同時にワインを飲み干し、給仕が二人のグラスにおかわりを注いだ。

ワインの助けを借りて、孝之はおもむろに口を開いた。

「健二君、よかったら、僕の部屋に住まないか」

健二は驚いた。

「いいんですか？」

「姉さんと暮らすのがいやなら、うちに住めばいい。丁度あいている部屋があるんだ」

「はい、ぜひ」

健二は興奮しながら言った。

「ただ、一つお願いがあるんだ。僕がやっている不動産の仕事の、秘書になって欲しいんだ。秘書といっても、難しい仕事じゃない。給料は出す」

「いいですけど……でも、なぜ僕を？」

「不動産の仕事に、今、大きなチャンスが来ているんだ。これから僕は大きな仕事を成し遂げなくちゃいけない。だから、これまでは雑用も自分でこなしていたけど、今後はメインの仕事に専念したいから、秘書を探していた。先日は、健二君を変なセミナーに誘って悪かった。僕の本業、不動産の方で、健二君と一緒に成功したいと思うんだ」

はて、確か孝之おじさんは先日僕をセミナーに誘う際、不動産屋は辞めてそちらの仕事の方に一本化したと話していたはずだが……健二はそう思ったが、まあ不動産もおじさんの適職かもしれない、そう思い直し、黙っておいた。

健二は、酒の酔いが回ってきたのと、秘書という言葉の重さで、しばし沈黙していた。それを見て孝之は口を開いた。

「まあ、秘書の方は急ぐ話じゃないから、そのうちに考えてほしい。それより、今夜はさっそく、うちに泊まっていかないかい？」

「は～い」

酔いが回ったのと夢心地で、健二はだらしなく答えた。

その後も健二と孝之はとりとめのない会話を続けた。デザートが出てくるまでに、二人でフルボトルを一本あけてしまった。二人とも酒には強い方だった。勝代も酒に強いと、健二は聞いたことがある。酒に強い家系なのかもしれない。

帰り道で、二人は腕を組んで歩いていた。孝之が健二の左腕に自分の右腕を通し、健二がそれに従った。腕を組んで嬉しそうに歩く二人は傍目に見て、叔父と甥ではなく、少し歳の離れた親友といった感じだった。

孝之は冗談っぽく健二にちょっかいを出した。

「健二君の腕、思ったより毛深いね」

「はい。よく言われます。でも脱毛なんて考えてません」

健二はさらりと流した。するとその話題は終わった。

孝之はすぐにまた、別の話題をふっかけてきた。

「健二君の眼鏡、くもってないかい。僕が曇りをふいてあげよう」

「いや、いいです。自分でやります」

その話題も続かず、そこで終わりだった。次々につまらないことでちょっかいを出してくる孝之を見ながら、健二は、かまってもらいたくてお兄さんにいたずらする幼い弟の姿を想像した。お酒のせいとはいえ、仕方がない人だ、健二は思った。健二は孝之の手を振り払って別れて帰ってもよかったが、あえて我慢した。孝之と別れたら、勝代の家に戻らなくてはならない。勝代と孝之、どちらと一緒にいたい。それは断然、孝之の方だった。

二人は通りを抜け、住宅街に入っていった。健二のスニーカーと孝之のローファターの足音が響いた。曇

り空は街の灯を反射し、うす明るく輝いていた。

十五分ほど歩き、孝之の自宅にたどりついた。都心の3LDKのマンションの二階の一室だった。孝之は一度結婚して妻子を持ったが離婚したと勝代から聞いている。やはり孝之の甲斐性のなさが離婚の原因だそうだ。この一室も、妻子がいたときに購入したものらしい。一人で住むには広すぎるだろう。

一つの部屋には机や本棚、ベッドが並んでおり、よく整頓されている。もう一つの部屋にはボディービル用のエクササイズ機器が並んでいた。孝之はこの部屋で、今もトレーニングをしているのだ。そして残りの一つの部屋は扉が閉じられていた。

「あの部屋は今は使われていない。そこが君の部屋になるんだ」

孝之は言った。

「それじゃ、シャワー浴びてきたら」

孝之は健二に促した。

「君に合いそうなパジャマ、僕のやつの中から探しておくから」

健二はいつも母と暮らしてきただけに、男性ならではの気遣いを嬉しく思った。健二は、服を脱ぎ、シャワーを浴び始めた。

健二がシャワーを浴びていると、ドアが開く音がした。健二はいぶかった、鍵はかけていたはずなのに……。

健二が振り向くと孝之がいた。孝之が鍵をこじあけて扉を開けたのだ。

「なんですか？」

健二は言ったが、シャワーの音にかき消された。

孝之は先ほどのスーツを脱ぎ、ボクサーブリーフの姿になっていた。日ごろのエクササイズの成果か、腕にも胸にも筋肉ががっしりとついている。

「身体、洗ってあげるよ」

満を持したように、孝之は言った。

まずい。健二は危険を感じた。その可能性は考慮していなかった。頭の中が真っ白になった。

孝之は健二の身体を見つめまわすと、おもむろに石鹸を取り、泡立てて、健二の局部を洗い始めた。健二は、身体がすくんで動くことが出来なかった。今、股間を触っているのは、自分ではない。女性でもない。男性なのだ。異常事態だ。こんなときに、身体の回路がショートして、動かなくなるとは。

健二は必死に頭の神経を総動員させた。アイデアの世界では、性交は自由に行われる。不特定の男女が交わりを持つことが許されており、結婚という概念が存在しない。生まれた子供は共同体の子供として、年長者達の主導によって育てられる。性交は当然、双方の同意のもとに行われるし、男女の間で行われる。そう、男女の間で行われる。健二は一瞬のうちにそれを確認し、必死で声を絞り上げた。

「僕は、そういうの興味ありません」

「いいじゃないか、水臭い。なあ」

そういう孝之に必死で抵抗した。身体が徐々に動くようになった。孝之の手をふりほどき石鹸を投げつけ、シャワーの水流を孝之の方に向けたまま、風呂場を飛び出した。

いくら叔父とはいえ、その願いは聞き入れられない。

必死で部屋を逃げ回りながらタオルで身体を拭き、急いで服を着て、靴ははずし手に持って裸足のまま非常階段を駆け下り、マンションを脱出した。孝之はマンションのエントランスまで追ってきたが、それ以上は追いかけてこなかった。健二は少しは安心したものの、靴を履き荷物を確認すると、自宅まで三十分の距離をほぼ駆け足で戻った。

残された孝之は、呆然としていた。健二が作ったあちこちの床の上に散乱する水しぶきだけが、部屋に

残されていた。孝之は、自らのしたことが理解できないでいた。ただ、健二に嫌われたことで、それまで心に咲いていた一輪の小さな花が枯れてしまった気がした。孝之にとって健二は、それ以上でもそれ以下でもなかった。

健二はその夜は怖くて寝られなかった。孝之が追いかけてこないか不安で何度も戸締りを確認し、布団を頭からかぶっていた。勝代に相談しようとも考えたが、考慮の末やめた。女性に相談するには問題がデリケートすぎる。孝之おじさんが来たら僕に知らせるように、ということだけ健二は母に伝えておいた。

こうして健二は孝之とは連絡を取らなくなった。また肉体的な要求をされてはたまらない、健二は思った。しかし健二は都心にはちょくちょく行くため、いつ孝之と出くわすか分からない。それが不安で健二は空き瓶など、武器になりそうなものを持ち歩くことにした。実際には健二の不安は杞憂に終わり、その後、孝之と顔をあわせることはなかった。

数ヵ月後、健二は図書館にいた。机に座り分厚い本を黙々と読んでいた。彼の右脇には3冊ほどの専門書が積み上げられていた。孝之に会って以来、健二は社会批判の気持ちが高まっていた。最初はおじさんに期待していたが、ああいう結果になり、失望した。もう、誰もあてにできない。自分の答えは自分で探すしかないんだ、健二はそう思っていた。健二は図書館こそが、自分の問いに対する答えを与えてくれる場所だと信じて疑わなかった。

こうして、健二は本を読み続けている。昼は図書館で本を読み、夜は借りてきた本を自宅の部屋で読む。これまでは自転車で昼夜町を徘徊していたが、昼間は孝之と出会わないかという不安、夜は冬になり寒くなったこともあり、あまり出歩かなくなった。

健二が読む本のジャンルは多岐に渡ったが多くは社会関係の専門書だった。社会問題に関するものや、哲学、政治、経済、教育……健二は多くのことを吸収して行った。地域通貨やアマルティア・センの本を読むと、健二は自分が資本主義に感じていた疑問に対して取り組んでいる人がいることを知り、溜飲が下がった。教育問題については、ルドルフ・シュタイナーの提唱する教育方法を知り、こういう教育方法がもっと広まればいいのに、と思った。こうして、何冊もの専門書を読むことで、世界には自分が味方できる人たちがいることを知った。これまでは、就職を強制する勝代のような勢力と就職以外の道を探しても見つけられない孝之のような勢力しかないと考えていただけに、光が差した気持ちだった。

一方で、何ともいえないもどかしさも感じた。健二は知識は得たものの、じゃあ具体的に何をすればいいのか、分からないままだったからだ。

健二は本屋にも行き、いろいろな本を立ち読みしていた。本屋には、図書館に置いていない本もあるし、お店によって、本の陳列が違うため、いろいろな本屋を巡ると、それだけ新しい本に出会いやすい。

ある日、本屋で高校の数学の問題集にふと目が留まり、購入した。ベクトルを使った問題や行列の問題を解いてみた。すらすらと解けた。受験勉強の時代から、数学のセンスは全く衰えていない。自分の数学力を誇りに感じると同時に、この数学の力を全くお金に換えることが出来ない自分を恨めしく思った。今更もう一度塾講師などのアルバイトに応募する気は健二にはなかった。

そして健二は大学を退学したことを一瞬後悔した。今は、数学が出来ても、何にもならないのだ。大学にいた時は、勉強をすることで単位の数が増えていき、卒業に向かって前に進むことが出来た。もし仮に大学に残っていれば、数学が出来ることや、専門分野の理論を勉強することで、対人恐怖でもそれなりの仕事は出来ただろう。研究者という道もあったはずだ。

でも、次の瞬間、その考えを振り払った。そんな仕事では納得いかない、そんな考えが健二の中に湧いてきた。既存の仕事に就くことはだめだ、そう健二に言うのは、彼の中の『奥底にいる者』だ。『奥底にいる者』のことをある者は『良心』というだろうし、またある者は『魂』や『神の声』という表現をするだろう。そういう超自然的な力がストップをかけるのを、健二は就職を目の前にするたびに感じていた。『奥底にいる者』は健二に言った、アイデアの世界を思い出せ、あの世界を実現するためには、お前が既存の仕事に就くことはマイナスになる。アイデアに沿った仕事を見つけろ。すぐにはそういう仕事が見つからないからといって、マイナスになる仕事をしてしまうと、その仕事にお前が取り込まれてしまうぞ。

健二は『奥底にいる者』の意見に納得し、早く、アイデアの世界につながる、本当の仕事を探そうと改めて決心した。

こうして、健二は数ヶ月の間、たくさん本を読み、時には市役所に行き、パンフレットを読んだりもし、社会の仕組みを大分理解することが出来た。同時に、自分にも何かが出来そうだという希望も出てきた。



NPOやNGOで活動している人を健二は尊敬した。一人では出来ないことを組織でやっている。そこにはリーダーシップも必要だし、協調性も必要だ。他にも対人関係をうまくやっていくスキルも必要だろう。健二にはどれもなかった。

それならばと、市役所でボランティアの募集があり、そのための講習会があったので健二は参加した。しかし、対人恐怖の健二には、つとまりそうにないように思えた。健二はそれでも勇気を振り絞り、養護学校や保育園など、いくつかのボランティアに参加してみたが、一緒に参加していた人に助けられてばかりで、要領の悪い健二はいつも取り残された。ボランティアと一緒に参加する人は皆優しかったので、誰も健二をとがめることはなかったが、毎回終わったあとには、虚しさが増すだけだった。

結局、決定打がなにもない。それでも、健二は悪あがきを続けていた。本屋や市役所で情報収集をしたり、NPOやボランティアサークルなど興味のある場所に連絡をしたりしていた。

こうして健二が行動を始めてから、様々な郵便物が健二宛に届くようになり、そのことで勝代も、健二が何か動いていることを知った。このころになると、勝代も経済的に安定していたため、イライラすることも減っていたため、健二のことを静観していた。

そして数ヶ月が経過した。桃の花が咲く中、健二は夜の公園で詩集や絵葉書を売っていた。まだ肌寒い空の下、十六夜の月と街灯が健二を照らす。時計は午前2時を指すが、繁華街の近くのその公園には出来上がったサラリーマン達の姿が目立つ。一人のサラリーマンが健二の露店の前で立ち止まり、興味深そうに絵葉書を眺めていた。

歳が明けて二週間が過ぎたある日、健二はいつものように市役所に来て、並べられたパンフレットを物色してていた。その中のひとつが健二の目に留まった。それは人権啓発のポスターで、ある有名な詩人の詩が表紙に書かれていた。健二はそれを読み、体内に稲妻が走るような衝撃を覚えた。健二はその足で本屋に行き、その作者の詩集を見つけて購入した。

健二ははやる気持ちを抑え切れなかった。健二は思った、僕がやるべきことが見つかった。それは、詩を書くこと。詩集を作ったり、詩に何か絵を添えて絵葉書を作ったり、僕はアイデアの世界をそういう形で表現すべきなんだ。

アイデアの世界には言葉は存在しない。皆、テレパシーのようなもので会話している。感情も考えていることも、全て相手に伝わる。だから嘘をつけないし、つく必要もない。常に真実を語り合っている。一方この世界では言葉が使われる。言葉には、制約が多い。言いたいニュアンスがうまく伝わらない場合もあるし、複雑な感情を的確に表す語彙がない場合もある。でも、制約が多いからこそ、やりがいがあるんだ、健二はそう思った。

そして同時に、それを何とかしてお金に換えたいという気持ちも沸きあがった。健二は思った、僕はお金を払ってくれる人にアイデアの世界から僕が受け取った輝くものを手渡すのだ、お金は対価でなければならない。

健二は自分の詩をどうやってお金にするか考え、露店販売で売ってみようと思いついた。場所は繁華街近くの夜の公園。そこには同業者が結構いるのを健二は自転車で夜徘徊するとき見かけていた。酔っ払ったサラリーマンがよく通り、ひやかし半分に彼らに話しかけ、お金を渡していた。あそこなら、僕もお金がもらえる。

しかし、健二は思った、露店販売とか、そういうのは許可が必要になるかもしれない。しかし、どこに許可を求めればいいのかも分からないし、だめなら誰かが文句を言うだろうと思った。実際には、健二が露店販売を初めて2ヶ月経過した今でも、誰も文句は言って来ていない。

健二の対人恐怖は、どこかに去っていた。普段夜の街を自転車で徘徊して、夜にはどんな人がいるのか、この国の夜道がいかに安全であるのか理解していたのも理由のひとつだが、それ以上にアイデアのために仕事をするならアイデアの世界の住人が助けてくれると信じて疑わなかった。

こうして健二は、露店販売のための詩を書き始めた。詩には彼が夢で見たアイデアの世界の情景をこめた。健二は思った、社会批判も大事だが、それ以上に、美しい世界を伝えたい。美しい世界を描けば、僕が社会悪だと思う奴らも、きっと感動してくれるはずだ。彼らは望んで社会悪になっているのではない。寂しい、認められたい、そういう気持ちが強いだけだ。

健二が夜の公園で詩の販売を始めた最初の日には2月頭の寒い夜だった。最初の客は、物珍しげに健二に近づいてきた、同い年くらいのお姉さんだった。絵葉書を見て、百円で買ってくれた。健二は値札をつけておらず、この値段は即興で思いついたものだった。自分の作品に買い手がついた。それは健二がこれまで経験したことのない感覚だった。健二にとって、ボランティアやお手伝いの報酬を除けば、お金を稼ぐのはこれが初めてだった。

次の日は酔ったサラリーマンの長話を聞いてあげて言われるがままに即興で詩を書いてあげたら、感動した、癒された、お小遣いだといって一万円をもらった。露店販売を始めて二日、ビギナーズブラックも働いたのだろうが、これでいけるという確信が健二に芽生えた。

こうして健二はすっかりこの仕事が気に入った。客の頼みに応じて即興で詩を書いたり、ポストカードを売ったり、場所を変えたり、近くにいたストリートミュージシャンに話しかけて営業したり、いろいろと工夫した。雨の日は公園の休憩所の建物の軒下を拝借した。

健二の露店販売の最初の月の稼ぎは5万円を超えた。健二の予想をはるかに上回るこの金額の多くは、酔っ払って気持ちが大きくなった人たちを相手に商売した結果得たものだった。お酒は気持ちを大きくしてくれるし、ある人にとって幸せの源になる、だからアイデアの世界と相性がいいのだ、と健二は理解していた。

健二が夜の街で露店販売をする自称詩人になり、お金を自分で稼ぐようになったが、勝代はそのことを快く思っていなかった。また、勝代が家賃収入を得ているマンションで空き部屋が出てきて、収入が落ち始めたことも、勝代の機嫌を悪くしていた。

その日の夕食後、二人がテレビのニュースを見ていたとき、とある一流企業の二期連続で増益のニュースが流れた。それを見た勝代は思いついたように言った。

「健二、あんたもこの会社に勤めてみない？」

それを聞いて健二は心底呆れた。そこは新卒か、よほどのキャリアのある人しか採用しない。対人恐怖の人間、しかも退学者を雇ってくれるわけがない。少しの常識があれば分かるはずなのに、その程度のことも分からないのか。その程度の知識で、この女は俺に首輪をはめ、勉強しろと命令し、将来をコントロールしていたのか、そして大企業のために動く機械になれと言っていたのか。健二はさらに思った、今だから俺は言える、大企業は勝代が俺に求めたような指示待ちの機械なんて求めていないはずだ、俺の人生をこれ以上めちゃくちゃにするな。

健二は勝代に何か反論しようとしたが、あまりにこみあげてくる気持ちに言葉が詰まってしまった。話し続ける母を置いて健二は自分の部屋に行き、今日の商売の準備を始めた。

「あ、こら待ちなさい。話はまだ終わっていません」

勝代は鍵のついていない健二の部屋に押し込んできてそう言ったが、健二は耳を貸さなかった。

十五分後、健二は商売道具を抱えて部屋から出て行った。勝代が声をかけようとしたが、そのまま健二は、玄関から外へと飛び出していった。空には十六夜の月が東の空低くに出ていた。

「おじさまの今の気持ちを詩にしてさしあげましょう」

健二はそう言うと、いつものように街灯の下、即興で色紙に詩を書いてサラリーマンに差し出した。サラリーマンは千円札一枚と、折り詰めのお寿司をくれた後、色紙を大切に鞆にしまって笑顔で客待ちのタクシーの列に消えていった。健二は早速もらったばかりの折り詰めを開け、腹ごしらえを始めた。十六夜の月が西の空で傾き、ビルの谷間で輝いている。寿司を口に入れながら、ふと、勝代のことを思い出した。「夕方出てくる前、母さん、何か言いたそうな感じだったな、無視して来てしまったけど、申し訳なかったかな」

そう思うと同時に

「でも、どうせまたいつもの小言だろう」

そう思い直した。

その後数人の酔っ払い相手に商売をした後、空が白み始めて客が減ってきたら、近くのストリートミュージシャンに話しかけて、他愛ない話題を続けた。健二にとって、いつもの夜だった。

そして夜が明けた。

朝になって帰ってきた健二を勝代が呼び止めた。どうやらまだ虫の居所が悪いらしく、文句を言い始めた。

「昨日私があんたに言いたかったのはね、そんな虚業で稼ぐなことよ。いい加減、きちんとした仕事を探しなさい。感性なんかで商売を始めても、最初はよくても長続きしません。企業に勤めるために、あなたには優秀な機械になってほしいの。感性を捨てて、機械になることが大事なの。機械になれば、大抵のことでは苦痛は感じません」

健二も、ここぞとばかりに反論した。

「だったらお母さんも会社で働けよ。機械になればよ。正社員がだめなら、パートタイマーでもしてみたらどうだ」

もはや勝代の理屈は、筋が通らないものだと健二は知っていた。

口論上等。いくらでもかかってこい。

しかし健二の期待と裏腹に、勝代は黙ってしまった。健二は勝代の一番痛いところを突いてしまったのだ。これまで勝代は、健二は反論しないのが当然と考えていた。勝代にとって、健二はブランド物と同列だった。従順な血統書つきのペットのように、持ち主を決して攻撃しない存在だった。それだけに、今回の健二の反論は、不意打ちをくらった形となった。

しばしの沈黙の後、勝代は小声で話し始めた。

「あなたは私にパートタイマーでもして働けと言うけれど……それはできない」

そうして勝代は過去、社員をしていじめられた記憶を話し始めた。上司からいじめられ、同僚と仲良くできず、苦勞した話を時にはすすり泣きながら、じっくり話した。健二も口をはさまずじっくり聞いた。しばらく話し終わると、勝代は黙り込んだ。健二もしばらくそのまま黙り込んで考えていたが、ほどなくして黙り込んだ勝代を置いて、健二は部屋に戻ってしまった。勝代は健二を呼び止めなかった。

その日、健二は胸騒ぎがした。4月下旬の陽気。健二の住む地方では桜は散り、青葉がまぶしい季節へと移行していた。健二の露店販売の持ち場のそばにある植え込みのツツジが日々少しずつつぼみを増やし、ひとつずつ花を咲かせていくのを毎日楽しみに観察していた。

夜が明け、店じまいをした後、その胸騒ぎが始まった。急に胸の鼓動が速くなり、様々な感情が一気に噴出してきた。焦り、不安、戸惑い、悲しみ……その感覚は瞬間に全身を駆け巡った。健二はその感覚に覚えがあった。大学を退学する前、パソコン通信で対人トラブルを起こして寂しさを感じたとき、同じ感覚を何度も経験していた。

健二は商売道具をしまったスーツケースに腰掛け、しゃがみこんで嵐が過ぎ去るのを待った。頭が回っている。外の世界は平常だ。すずめの鳴き声が聞こえる。始発電車のエンジン音がする。ゴミを漁りに来たのかカラスの鳴き声もする。焦りと不安が体中を駆け巡る。

しばらくして健二は落ち着いた。そして思った、なぜ今、この感覚が襲ってくる？寂しさも、何もなければなのに。それが虫の知らせだと分かったのは、健二が帰宅してからだった。

健二が帰宅すると、リビングで勝代は青ざめていた。朝だというのにワンピース姿で、昨日の夕方と同じ服だった。目にはクマが出来ている。どうやらあまり寝ていないらしい。

健二がどう声をかけるのか決めあぐねていると、勝代の方が健二に話しかけてきた。「健二、大変なことになったわ。私達の不動産が、孝之に取られてしまったの」

勝代は健二に事情を話し始めた。

その前の晩、健二が商売に出かけた後、電話がかかってきた。勝代が取ると孝之が出た。孝之は前置きななしに突然切り出した。

「もしもし姉さん、賃貸のあの土地と建物だけど、もう、手放さなくちゃいけなくなったから」

突然の話で、勝代は理解できないでいた。私名義の不動産になぜ、孝之がそんなこと出来るのか、と勝代は思った。そこで、孝之は詳しい話を電話越しに始めた。

孝之は、不動産屋として大きな仕事をしたいと考えて、土地の転売を思い立った。博多に一億数千万円する土地を見つけ、値上がりすると踏んで購入を思い立った。しかし、お金を借りる方法がない。フリーであり信用もそれほどない孝之は、銀行の融資を受けることもできなかった。自分の持つ土地を担保に入れてお金を借りたが、それでも足りない。そこで孝之は、勝代の不動産のことを思い出した。勝代は家賃収入のためのアパートを購入する際、孝之にまかせっきりだった。孝之は勝代の権利書や実印の隠し場所も知っていた。そこで孝之は、無断でアパートの権利書と実印を拝借し、無断で担保に入れてしまった。勝代は、この事実を孝之がこの日明かすまで、ずっと気づかないままだった。

孝之は、こうして借金をし、お目当ての博多の土地を購入した。孝之の不動産業の勘が、値上がりすると信じて疑わなかった。しかし、何ヶ月待っても、一向に売れない。値下げを始めたが、それでも売れない。孝之は焦りを感じ始めた。毎月の借金の利息の返済があるからだ。土地が売れ借金を完済するまで、払い続ける必要がある。売れるのが遅れるほど、どんどんお金が減っていく。借金は億単位のため、毎月の返済額は数百万円に及んだ。買った土地は転売用の土地で、孝之には使い道が全くない。孝之は、他の親戚や離婚した元妻の家庭にも金の無心をするようになり、けむたがられた。

そしてついに先月、返済が滞ってしまった。今持っている博多の土地も、どんどん値下げをしており、二束三文でしか売れそうに無くなった。もう利息は払えないから、孝之は担保の不動産をあきらめることにしたのだという。

あまりに急な話だったので、勝代は孝之に会って話すことにした。勝代は電話を切り、すぐに身支度をして出かけた。夜の街、赤のBMWを走らせ、孝之の部屋に向かった。

最初は勝代は腹を立てていた。しかし勝代がどれだけ文句を言っても、孝之は自分の非を認めなかった。「自分はお金を稼ごうとしたし、土地は値上がりすると確信していた。売り手が見つからないのが不幸だっただけだ」

勝代は孝之のそのあまりに身勝手な意見に訴訟を起こすことすら考えた。

しかしその時、かつて勝代自身が健二に土地の値段が下がった時にやつあたりしたのを思い出した。そして思った。うちの家系は、土地に執着しすぎてきた。そして土地のために無神経に身内を苦しめてきた。孝之も被害者かもしれない。それに孝之は孤独だ。大事になる前に、私が味方になるしかないのかもしれない。

十分、大事になってしまった後だったが、勝代は初めて、孝之を受け入れることが出来た。そして、最終的には勝代が折れた。話し合いの結果、今回の件で訴訟は考えない、といった形になった。

勝代は日付が変わる頃帰宅し、その後、呆然としていた。着替える気にもなれず、いつもは飲まないお酒を飲んでソファで考え事をしていた。孝之が担保に入れたアパートは、勝代達の現在の収入の大半を得ている物件だった。それを失うことは、今後どう生活していくのか、理解できなかった。かといって孝之を強く責めることも出来なかった。それに、責めても土地が返って来るわけではない。様々な考えが、勝代の頭で渦を巻いていた。

勝代は健二に事情を話し終わると、言った。

「私は、仕事をすることにしました。職種はまだ内緒だけど」

すかさず健二は聞いた。

「僕は『虚業』を続けていいのですか」

「職業に貴賤なし。あんたも結構稼げるようになったそうじゃない。しばらくはそれを続けてみなさいよ」

「ありがとう、母さん」

口ではそういいながら、健二は心では思っていた。

「当然だ、自分の仕事を自分で選ぶのになぜ許可がいる？」

アイデアの世界では、因果応報が徹底されている。人に対してしたことは、分かりやすい自分に返って来る。善意を施せば善意が返って来るし、迷惑をかければ、他の迷惑をこうむる。今回の件で、少しだけ現実がアイデアに近づいた気が健二にはした。

その一ヵ月後、勝代は占い師を開業した。勝代に向いているか健二には疑問だったがそれは口にはださなかった。

勝代は都心に部屋を借り、輸入物の家具を取り揃え西洋占星術師らしい空間を作った。勝代の専門は四柱推命だったが、開業のためにタロットカードなど流行りの占いも勉強した。開業後、雑誌に広告を載せ、ぼちぼち客が来るようになった。勝代はもともと西洋人のような顔つきをしている。そこに化粧やティアラでさらに占い師らしい風貌をつくり、その写真を広告に載せたことも、集客効果につながった。

そして、アパートが差し押さえられた。家賃収入が激減したが、親子二人、何とかやっていくことが出来ていた。今後もやっていけるといふ、根拠のない自信も双方にあった。

孝之は不動産業を続けていたが、相変わらずの仕事ぶりで、その様子が不動産屋仲間で悪い意味で噂になっているという。

かつて健二も孝之からは嫌なことをされたが、今では彼を責めていない。なぜなら健二には分かる、孝之が強い寂しさの中にいることを。妻子に逃げられ、健二に逃げられ、仕事もうまくいかず、行き着いた先が、あの「大きな仕事」だったのだ。そこまでして、みんなにかまってもらいたかったんだ。

同じようにして昨今、ニュースを見ていると、理解に苦しむ事件を起こす人も少なくない。でも、多くの犯罪は、寂しさから来ているんじゃないか、そう健二には思える。一人でも多くの寂しさを取り除くため、今日も詩を書こう、健二はそう思い、露店販売で売るための詩を書き始めた。

生きる

いま ぼくがいる

ただ ここにいる

目に入る すべてが

かんじる すべてが

とても いとおいしい

ああ、ぼくは 生きている

母と壊れた機械

<http://p.booklog.jp/book/64822>

著者: 蜷川幸秀

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yukihide01/profile>

2013年1月23日公開

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64822>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64822>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社: 株式会社ブクログ